

論点

デフリンピック理解深めて



やまね しょうじ
山根 昭治氏

全日本ろうあ連盟理事・スポーツ委員長。今年7月のトルコ・サムスン大会など夏冬3度のデフリンピックで日本選手団長。61歳。

私たち聴覚障害者の4年に1度のスポーツの祭典、デフリンピックが大きく発展しようとしている。トルコ黒海沿岸のサムスン市で7月、開催された第23回夏季デフリンピックは、規模も運営もこれまでで経験したことがない大会だった。

史上最多97か国・地域約3100人の参加者に対し、大学の学生寮を充てた選手村が初めて設けられ

た。21競技会場へのバスは案内のボランティアが付き、移動はスムーズだった。トルコの組織委員会は各競技の映像をユーチューブに配信。全世界に迫力ある実況が届いた。会場の応援も素晴らしかった。入場無

料で、開会式をはじめ観客席が埋まった。日本が金メダルに輝いた女子バレーボールの決勝戦も満員となり、声援で盛り上がった。トルコは、イスタンブールが2020年五輪・パラリンピック招致で東京に敗

れた。将来の五輪招致を見据え、この大会に力を入れてきたという。3年後の東京パラリンピック全会場を満席にする目標を掲げる日本の参考になる点も多い。主催者の国際ろう者スポーツ委員会からは更なる発展を目指し、組織の名称を国際デフリンピック委員会（IDC）へ変更する検討を

していると話があった。承認が必要になる国際オリリンピック委員会（IOC）の委員も現地を訪れていた。

日本選手団は金6、銀9、銅12の過去最多のメダルを獲得。金メダル数の国別順位も6位に躍進した。派遣基準を厳しくし、少数精鋭にしたのが功を奏した。チームとして一つにまとまっていた。選手村の食堂で食べ終わった食器を選手が片付けたのを、トルコ側にたたえられたことも誇りだ。

ただメダル大国のロシア、ウクライナはもとより、韓国、中国に後れをとった。韓国選手は1か月〜1か月半の強化合宿を繰り返して大会に入ってくる。仕事を休めない日本選手が合宿で

ルを獲得した競泳の複数の男子選手は来春に大学や大学院の卒業を控え、就活時期だが、「就職することが最優先。競技の継続はその次」と明かしていた。

まだまだ大会の認知度は低い。選手の勤務先の理解に加え、合宿場所としてナショナルトレーニングセンターを使用させてほしい。

毎年、文部科学省にデフリンピックやスペシャルオリリンピックのことを教科書に載せてほしい、と要望している。普通学校で学ぶ難聴の子どもたちが増え、希望となる大会の存在を知らせる取り組みも必要だ。

私は、デフリンピック日本開催の可能性を探る全日本ろうあ連盟の戦略調査チーム事務局長も務める。サムスンでは大会の公用語の国際手話の通訳者を国外から50人も呼んでいた。日本では手話を「言語」として認知する法制定の運動をしているが、進んでいない。

大会を招致すれば日本社会で聴覚障害者のコミュニケーション手段を考ええる一歩になる。早ければ2025年夏季大会の招致に踏み切るか。聞こえる人の助けが不可欠で、様々な人の力添えを期待している。（聞き手・編集委員 井手裕彦）